

## 死をどうしたら受けとめられるのか⑥

おやさと研究所教授  
堀内 みどり Midori Horiuchi

## 死の準備教育 (続き)

日本における「死の準備教育」はアルフォンス・デーケン氏によって提唱され、「自分に与えられた死までの時間をどう生きるかと考えるための教育」と定義されています。

デーケン氏は、NHKの「人間大学」の一つの講座として放映された「死とどう向き合うか」の講師を務め、その時のテキストが加筆されて出版されたのは1996年(放送は1993年7月～9月)でした。そして、昨秋、新たなデータやこれまでの経験、知見をもとに『新版死とどう向き合うか』(NHK出版)を発表しました。その冒頭で、

この世に生を受けたすべてのものにとって、死は避けることのできない現実です。では、このだれでもいつか必ず訪れる死をしっかりと見つめて考えるためには、死をどう捉え、どう理解したらいいのでしょうか。これは年代や性別を問わず、人間としてどうしても取り組まなければならない切実な課題だと思います。これを研究するのが、死生学という学問の分野です。(同書、3頁)

と述べ、その上で、

私は死生学の実践としての「死への準備教育」が、私の愛する第二の祖国日本にしっかりと根づいて、豊かな実を結んでほしいと念願しています。これはだれもが、かけがえない自分の生命を、最期まで大切に生き抜くための教育です。ですから「死の準備教育」は、そのまま、よりよく生きるための「ライフ・エデュケーション」にほかなりません。(同書、4頁)

とし、死と真剣に向き合い、死を考えることによって、私たちの「生」が大切なものとして理解されるようになると断言しています。

さらに、東日本大震災を転機として日本が変わるためには、「いま一度原点に立ち戻って、自分にいただいた、命を最後までどう大切に生き抜くか、死を見つめることを通して、生き方を問い直す必要がある」(同書、6頁)と述べています。しかしながら、このような真摯な思いがどれほど日本人に届くのかは、私たち自身が、死を自分の問題として、死そのものに直面する覚悟が必要でしょう。昨日から新聞やテレビで大きく取り上げられているニュースの一つは、去年10月、大津市で当時中学2年生の男子生徒が自殺し、直後に学校側が行ったアンケートに対し、15人の生徒が「男子生徒が自殺の練習をさせられていた」などと回答していたことが関係者への取材で分かった、というものです。これが現実であるなら、「死」はあまりにも軽々しく扱われているように感じられてなりません。何のための、そして誰のためのアンケートだったのでしょうか。

デーケン氏の死の準備教育は、自分が自分の死にどのように向き合っていくのかということが主要なテーマになっています。それは彼の冒頭の言葉にあるように、生を豊かにするためのものにならなければなりません。死を真剣に考えれば、生が大切だということがわかってくるのです。だからこそ、それは自分だけのことで終わるのではなく、他者への関わり方となって現われてもきます。私たちは独りで生きているわけではなく、周囲の人々との関わりが必然として「在る」からです。

さて、デーケン氏は、現代社会は死をタブー視してきたからこそ、今、死について語らなければならないと言っています。つまり、第1に、20世紀に起こった二つの大戦で、あまりに多くの人々が犠牲になりました。生き残った人々はその死の悲惨さを語りたくない気持ちがあったということ。第2に、しばしば指摘されていることですが、その後の平和な世界で、医療技術が発達した一方で、多くの人が病院で様々な医療機器に囲まれて最期を迎えることが増えたこと。これらのことが死を私たちから遠ざけ、死がタブー視され、死に対する心構えを学ぶ機会を奪ってしまったと言うのです。

そして、この状況を変えたのは、エリザベス・キューブラー・ロスの研究だったとデーケン氏は指摘します。日本では『死ぬ瞬間』という題目で出版された一連の研究のことです。彼女は末期患者の最期の心理状態を患者と対話することで記録し、分析しました。そして、「死のプロセス」を明らかにし、また、「悲嘆のプロセス」も研究しました。どうやって人は死を受け入れていくかという臨床的な報告です。彼女の研究に触発され、機械に囲まれた病院死の現実を目にし、「これが人間らしい死に方といえるのだろうか」と思うようになったということです。そのデーケン氏は、「新しい死の文化を目指して」を『新版 死とどう向き合うか』の最後のメッセージにしています。

死を前にする時、私たち人間はすべて平等です。死は人生の同伴者であり、自分をいつわることなく、自分自身と向き合うための鏡とも言えましょう。この世に人間として命をいただいた以上、私たちはだれもがその人の持つすべてを生かして、最期まで、よりよく生きることを求められていると思います。

これからは、死をタブー視することなく、すべての人が、その人らしく生命の終わりを全うできるような、新しい死の文化をつくりだしていきましょう。それはそのまま、これからの新しい生き方を探る道にもつながっているのです。

病院などの密室に閉じこめられた死を解放して、大人も子どももすべての人が、死を自然なものとして受け止め、自由に話し合えるような雰囲気をつくりましょう。その中から、必ずお互いの命をもっと大切に考える、成熟した社会が生まれてくると思います。超高齢社会を迎えた今だからこそ、死に対する世の中の意識を変え、だれもがもっと人間らしく、笑顔のうちに死を迎えられるように、生と死を考える人の輪がさらに広がることを念願してやみません。(同書、275頁)

以前に紹介したように、死を教えることは、実は大変難しいことです。でも、死について語りあうことは重要です。死がどのようなものであるのか、死が何をもたらすのか、そして、なぜ死んでいくのか。

デーケン氏が提唱する「新しい死の文化」が果たして構築されるかどうかは即断できないとしても、死を考える人は増えてほしいと願います。それが「お互いの命をもっと大切に考える、成熟した社会」を生み出していくのに必要だと思えるからです。